恋愛

私のアンソロジー 1

編集
解説 松田道雄

私のアンソロジー 1

恋愛

編集・解説

松田道雄

筑摩書房

私のアンソロジー　1

恋愛　編集・解説／松田道雄

編者略歴

松田道雄（まつだ・みちお）

1908年茨城県に生まれる。1932年京都大学医学部を卒業。初め困窮者の結核治療にあたり，戦後は開業医として幼児の治療にあたる一方，知識人のあり方やロシア革命に関する評論を発表。現在は著述に専念している。

（著書）「私は赤ちゃん」「君たちの天分を生かそう」「日本知識人の思想」「ロシアの革命」「革命と市民的自由」「恋愛なんかやめておけ」「われらいかに死すべきか」等。

1971年9月17日　初版第1刷発行

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
振替東京 4123　Tel. 291-7651
郵便番号101-91

©1971　第1回配本　装幀／中島かほる

三松堂印刷・永興舎製本

1395-03301-4604

目次

I　さまざまの恋愛

愛は幾度可能なのか　瀬戸内晴美　3

ドレミファ交遊録（抄）　いずみ・たく　10

愛と結婚に関する六つの手紙　倉橋由美子　22

アダムの言い分イブの言い分　永六輔　42

愛されるということ　なだいなだ　50

現代の恋愛論（抄）　椎名麟三　63

傷害罪犯人容疑者としての自分　田中英光　72

エロスの招宴（抄）　高見順　76

年頃　ミヤコ蝶々　93

ふもれすく　辻潤　102

自由意志による結婚の破滅　伊藤野枝　123
男女関係について　大杉栄　135

II　恋愛または性

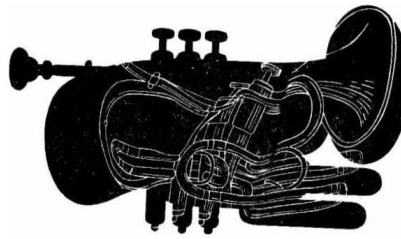
抽象的思惟行為における抒情　中野重治　153
男と女の愛情　伊藤整　170
性の思想・三代史序説　作田啓一　179
性の変容—恋愛　多田道太郎　189
日本の「性」について　小田実　201
一夫一婦制について　吉行淳之介　209
禁欲の思想　富士正晴　214

III　恋愛にかんする論議

艶書　井伏鱒二　225
恋愛について　石川淳　231

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

わかりにくい有島武郎　本多秋五　246
誰かが言わねばならぬ　平野謙　264
勘定高い人・卑怯な人は必ず恋愛から逃げたがる　安岡章太郎　278
恋愛論　坂口安吾　282
*
対話ふうの解説　恋愛はほんものでありうるか　松田道雄　289
著者略歴　315



I

さまざまの恋愛

愛は幾度可能なのか——瀬戸内晴美

自身の迷心への告発として

一九〇四（明三十七）年三月十二日、神田美土代町神田教会で、平民新聞主催の「社会主義婦人講演会第五回」というのが開かれている。聴衆は僅か十六名という寥々たるものであったらしいが「其数少しと雖も種々なる階級、種々なる地位、種々なる年齢の人々あり、吾人は此の少数なる聴衆が社会主義の思想を婦人界に伝播するの力は案外多大ならん事を信ずる者なり」と、平民新聞の中では気焔をあげて、講演内容をかかげている。

石川三四郎、堺枯川に先だち演壇に上った村井知至が「日本婦人に関する二大迷想」という題で講演した中に、

「婦人に関する二大迷想の第一は『女子は必ず男子に嫁すべきものという考え』、その第二は『女子は必ず男子に従うべきもの』という考えだ」と述べ、「私には娘が沢山あるが、それが嫁する時には、別れのことばとして『気に入らぬ事があったらいつでも帰って来い、我々は両手を挙げて門戸を開いて待っている』というつもりである。今後の婦人たる者は善く男子に対抗して、罷り違えば離婚するという覚悟を以て嫁さねばならぬ、それ丈の腰があれば男子に馬鹿にせられる筈は無い」といっている。

今から七十年前にも、結婚に対してこんなはっきりした意見があったのに、今尚この二大迷想が全く拭い去られているとはいえないのだから、人間の智慧の進歩なんて大したことではないと思う。今流行のウーマンリブの闘士たちのかかげている闘いの内容を見ても、この二大迷想打破の域からさして多くは出ていないようだ。

二大迷想の根底には女のバージンの価値が厳然として

坐っている。処女であったはずのマリアがころりとキリストを産み落すという神話は、如何にも人間臭くていいのだが、マリアが見知らぬ「誰」かに犯されながら、それが子を妊むことにつながるとはゆめ知らないでおとなしく身をまかせていたということが処女性なのであって、いいかえれば、性的無知の「おぼこ」ということになる。科学的には、人工授精しなければ処女が子供を産むなんてことがあり得るはずはない。キリストが人工授精の子供だとしたら、神話は根底からゆらいでくる。そのキリスト教が一夫一婦制をいくら力説してみたところで迫力がない。日本の昔だって、狩に出た城主が野良に出ている百姓の娘や人妻に気をひかれ、権力を笠に通じてしまい、亭主や許婚者には、位や金をやってごまかしてしまったという例はいくらもある。もちろん、その時心ならずも生れた子供は、亭主や許婚者が有難く頂戴して自分の子供として育てあげている。

バージンを奪われたから、自殺したいという女の身の上相談は、明治から昭和の戦前まで連綿とつづいてきた。たまたま失った処女をどうとりつくろってバージンを装い嫁ぐかということが、女にとっては必死の、生きる道であった。

現在でも、処女膜が結構飛ぶように売れ、処女膜植付の手術は、堕胎の手術と並行して大繁昌だとか。リブが叫ばれている今日、女にとっては見逃せない情けなさではないだろうか。女が何よりも闘いとらねばならないものは、処女膜尊重に対する女自身の迷心への告発でなければならない。

セックスの伴った恋を

私たちが育てられた時代は女らしさが娘の躾の第一条件であった。女らしさとはイコール処女らしさということで、女はたとい処女を失っても処女らしく装うことが女らしさの真髄とされていた。

処女膜迷信からの解放が完全になされた時、女は二十五で売れ残りなどいわれることもないし、二十二で売りいそぐこともない。むしろ二十一にもなってもまだ処女などというのは、身の置き所もないくらい恥ずかしいというように変ってくるべきではないだろうか。いや現にもうすでに、非処女で処女らしく振舞わされた女に変って、真正処女なのに、つとめて非処女らしく振る舞い、

そういう言動をしたがる女の子も増えてきている。

処女性への迷信から女が完全に解放された時は、結婚の形態も否応なく変らざるを得ないと思う。

レオン・ブルムは恋愛と結婚の相手をはっきり区別した方がいいという説をたてているが、私も全く同意見である。

私の育った時代は、女はただひとりの男とめぐり逢い、その男に恋し、その男と結婚し、その男の子供を産み、その男の死を見送り、少しおくれて、子供や孫に見送られて死ぬというのが最も幸福な生涯と教えこまされてきた。そして結婚前の男女の交際は不良のすることで、良家の躾のよい娘は、親や周囲の世話焼のとりきめてくれた青年と見合いをし、気にいられたら（選択権は九九パーセント男の側にある）結婚するというのが理想的な結婚の方法だとされていた。しかし考えてもみたらいい。浜の真砂ほどもある無数の男の中からただひとりを一度で選ぶなんて全知全能の人間でもないかぎり宝くじをひき当てるより可能性の少ないことである。

その上、一度嫁したら、離婚はタブーで、出戻りはオールドミスよりもっと社会から軽蔑され不利益な肩書を押しつけられるのだ。出戻り女は如何なる事情があったにしろ、辛抱という美徳が足りなかった女であり、でなければ最も軽蔑されるべきふしだらな女ということに決められてしまう。まして子供を置いて出るような女は人非人扱いされた。

レオン・ブルムは『結婚について』の中でこうもいっている。

「二十代の時に子供を持てば、女性の身体は変ってしまう。三十歳では身体はそのまま保持される。そして四十歳でなら子供を持つと若がえる」と。

女は自分の選んだ時に子供をつくればいいので、母親になる前に本能を最もはげしく或いは最も強く消費しつくす自由を行使すべきだと説いている。

女は結婚前に情熱的な恋を何度もした方がいい。もちろんこれはセックスを伴った恋である。

感覚的に好ましい男でも頼りにならない男は多いし、頼もしい男でも感覚的に全く肌の合わない男もいるものだ。これは男の側からもいえることで、こういう二人がいっしょに暮したら、お互いが悲劇である。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

人間は全知全能でないのだから、思いちがいや早とちりや、とんでもない誤解をしょっちゅうする。もし、二人の男女がお互い、そういう過ちを犯してしまって、いっしょに暮してみた時、予期しなかった不都合に逢えば、勇敢に何度でもやり直せばいい。

困ることは、一方が誤ったと感じた場合、他の一方は誤っていなかったと妄信している場合である。そしてたいてい男女の別れとはほとんどがこのケースで占められていて、どちらかがより多く傷つく結果になる。

生涯にたった一人の男しか知らないということは、かつて女の最高の美徳とたたえられてきた。しかし今では長い人生でたった一人の男しか経験しなかったということは、よほど魅力がなかったか、極度にひっこみ思案な女だったということだけで、さして自慢になるものではない。

貞操というのは強いられて守るべきものではなく、心と肉体の調和が完全に一致した場合、女の方は、自然に他の男に目をくれなくなるものだ。そういう女がふたたび他の男に目を向ける時はそれまでの男との間に、見えると見えないにかかわらずある種の弛緩が生じている時である。

男も女も、生来の本能はポリガミー的なのではないかと私は考えている。生命力が旺盛で、人生に好奇心を抱く若々しい情熱の持主ならば、この世で最も複雑で興味のある変幻極まりない人間という動物の他性をもっともっと知りたいと思うのは当然であり、知るという行為は互いの体内まで入りこみたいという願望に外ならない。

根深い風習と闘うこと

結婚の形態をとらないでも、女は子供を産めるし、育てられもする。結婚という形態が今でも尚、女の方により多くの犠牲と忍耐を強いる以上、経済的に自立できる女が、次第に在来の結婚の形態を拒否しようとするのは当然の成行である。

たまたま最初の男が、最も自分にふさわしい男だと信じこむ場合もある。しかし、それは他を知らないからで、魚しかたべたことのない人間が、獣肉の美味しさをはじめて味わって、自分の味覚のこれまでの経験を口惜しがることもあるように、二人以上の男性を経験しなければ、本当に自分の好ましい男の真の価値もわからない。

今では女も自由に恋愛し、自由に男を選び、または選び直す女が少数ながら増えてきた。

結婚生活から飛びだす女も、日と共に増加している。とはいってもまだ社会的条件では、出戻り女や、ふしだら女の陰口はまぬがれないし、再婚の条件は依然として、再婚の男よりも数等不都合な扱いを受けている。

六十歳の男が二十歳の娘と再婚する場合、人は六十歳の老人の精力と勇気と実力を少しのひやかしをこめながらも心から賞讃する。

しかし、六十歳の女が二十歳の青年と再婚しようものなら、人々は六十歳の女を不気味な生物を見る目付で眺め、色きちがいという陰口が囁かれ、不潔で醜悪なものに触れたような身震いの反応を見せる。そればかりか六十何歳の女が七十何歳の老人と再婚してさえ、男の方には祝福を贈りながら、女の方に気味悪そうなまなざしを投げかける。

相変らず、女は五十にもなれば、女でないと自覚した方がつつましい上品な女だとみなす風習が根深く社会には残っているようだ。

この世間の目に平然と立ちむかえるだけの自信を持つ真に解放された女は、まだ極めて稀にしか存在しない。

自由な女の考えは……

男にとっては、結婚生活が何かと実生活に便利さをもたらす以上、男は適齢期を次第に早めて、結婚生活を益益需めるようになるだろう。

まやかしのマイホーム主義、雑誌のグラビアじみた絵に描いた餅のような家庭の団欒、妻の欲求不満と嫉妬と倦怠感、それを見て見ぬふりしか出来ない去勢された疲れきった夫たち、中身が空疎になればなるほど容れ物を豪華に飾りたてたがる家庭という名の砂の城。

解放された女は、こんなまやかしの崩れ易い城に憧れないかわり、きびしい孤独との闘いにひとり歯向わなければならない。

真に充実した愛と弛緩しない情熱を保ちたいと望む時は、相手と共に暮さないのが最もいい方策だということは、何度かの苦い経験で彼女は知っている。

漸く、真に自分にふさわしい最も好ましい相手にめぐりあった場合は、相手はすでに妻子をかかえている。

他人の家庭をこわすことのエネルギーの無駄さを、も

う彼女は十二分に経験しているし、まわりにもうんざりするほど、眺めている。

自立し、自分の仕事を持ち、自分の情熱の欲する時だけ、みたしてくれる男を迎える生活、そしてもし、自分だけで育てられる自分の産んだ子供が一人か二人あれば、彼女は申し分ない人生を送っているといえる。

しかし、彼女がその時孤独からも解放されているわけではないのだ。多くのマイホームを誇る妻の内部が、白蟻にくいつくされた館のようにがらんどうに虚しく、一突きで崩れる脆さを内包していて、夫への不信と懐疑と、子供との断絶感で、狂おしいほど孤独なのと、さして変らない孤独と彼女も同居している。けれどもその二つの孤独の質は違う。

人の目に外がわからはどんなに理想の家庭らしく見えたところで、近よって見れば遠い芝生のようなもので、たいていは荒れはてているのが大方の家庭というものの正体だ。

いや、自分たちの家だけはちがうといきまく主婦も必ずあらわれるが、それは彼女たちが、真実を見る目を持たないか、本能的に真実を知ることの怖さを感じていて、つとめてだまされたがり、幻影のなかに生きることを選びとっているかにすぎない。

本当に解放された自由な女は、人間が決して、他からは充たされないこと、自分の愛などという力が他を決して充たしきりはしないことを識っている。

それは一度ならず二度三度と、勇気を持って、新しい恋に立ちむかい、男との同棲の試みもした上で得た真理なのである。

だからといって、彼女たちは愛することを止められるだろうか。

この瞬間の愛を尽す

マイホームの中の妻たちが、自らまやかしの幸福の幻影の中に身をとじこめ、偽の酩酊に身をゆだねているのとはちがって、彼女たちは、何度も性こりなくくりかえしてみた真剣な恋とひきかえに、人間は孤独だという動かし難い真理を抱きとめている。

孤独に徹した後にも生じるやさしさこそ、人間だけに持つことの許された覚めたやさしさである。

それは情熱だけに流される肉感性から生れるあのむせ

かえるようなおしつけがましい利己的なやさしさではなく、相手の孤独を汲みとるゆとりのあるやさしさである。

陽にあたためられた砂地のように、それは他者の淋しさを際限なく吸いつくす。

人間は淋しいから、燃えた後には美しいけれどすぐ冷たくなる脆い灰が残るから、人間はよりそいあい、あたためあおうとする。

その時、はじめて、相手をゆるす真心の愛が生れる。

相手の欲することもかなえてやることが自分の素直な歓びにつながることを知る。

それは、共同の利益で結ばれていると思いこみ、台所用品や、テレビやピアノや家を買うために力をあわせている家庭の夫婦の結びつきとは全く質のちがった次元の結びつきになる。

その時、彼女にとっては、結婚という形態や家という外殻は何の必要もなくなっている。

人間は死ぬ直前まで、人を裏切ることの出来る弱いおろかな生物であるという自覚の許に、明日崩れ去るかもしれない今日の愛を守る情熱が湧くのである。

永遠の愛など決して存在しないことを知っているからこそ、今日、この瞬間の愛の大切さを一滴もこぼさず味わい尽そうとする。

形式的な結婚など何度繰りかえしても、そこからは夫婦という名の男女の狎れあいのだましあいしか生れないことを知っている彼女は、決して今更結婚という形式の鎖につながれようとは考えない。

年老い、孤独に、どこかで行き倒れる死を迎えたとしても、自覚して、この道を選びとった彼女の愛の歴史には悔は残らないだろう。

幾本もの手に、死の床でしっかり手をとられていても、人はそこに繋ぎとめられず、必ず生れた時と同じくただひとりでこの世を去って行くのだから。

女が何度結婚したかというより、女が何度愛したかということが、その生涯にとっては意義のあることだ。

（一九七一年『婦人公論』七月号）

ドレミファ交遊録(抄)――いずみ・たく

年上の女(ひと)との真面目な恋

劇団「小熊座」は小人数ながらも、チームワークが大変良かった。演出、装置、照明、衣装、その他舞台裏を含めても、十数人という小世帯。

演技部もそれぞれ、裏方の仕事を受けもって、仲良く芝居を楽しんだ。

その半数は現在でも、放送局、劇団などで活躍している人が多い。

主演俳優・前田武彦も、当時、神奈川県下の小学生、中学生の間で、大変な人気スターだった。

彼の演じた母を恋う浮浪児は、県下の小学生の涙をしぼったし、彼の吹くハーモニカの音色に、女学生は、ハンカチで瞼をおさえたものだ。

当時脚本は、GHQ(在日米軍総司令部)の検閲なしでは上演ができなかった。

ボクは、前田の主演する、浮浪児を素材にした脚本を書いて、その浮浪児たちと仲良くなり、彼らと生活を共にしたり、起居を共にしたりして、親を困らせた。

脚本の検閲を受けに、GHQへ、ゾロゾロと浮浪児たちと一緒にいって、当時の米軍の情報将校たちをびっくりさせた。

悲しい歌　嬉しい歌
　たくさん聞いた中で
忘れられぬ　一つの歌
　　それは仕事の歌……

劇団の中の四人の男性の、ボーカル・クワルテットはシドモドと、劇の伴奏をした。前田はテナー、ボクはバ

スだった。

浮浪児を連れて家へ

当時のボクの家は、上野の音楽学校や、美術学校のある森から鶯谷をぬけて、日暮里の山の上。

田端にぬけるその道は、久保田万太郎や芥川龍之介の住んだ、静かな住宅地だった。五坪ほどの自宅の庭は、舞台装置の置場になって、公演が近づくと、夜を徹して、大工仕事に励んだ。

劇団全部で自宅にザコ寝をしたり、中には居候(いそうろう)を決めこむ劇団員もいたりした。家の中は、歌声が絶えまなく、

「可哀そうに。今泉さん（ボクの本名）の息子さんは、とうとう気が狂ったよ」

という近所の噂に、母はずいぶん悩まされた。

もっとも、歌を歌いながらトンカチ、トンカチ、一晩中やったり、浮浪児をつれてきたり、小さな家に十数人が同居すれば、近所の人の目にはとても常識的な行動とは見えないのは当り前であろう。

芋にもたれた　ものすごいお腹
リュック片手に　買出しに……

替え歌を作詩して、歌っているのは、主演俳優の前田武彦である。

岩にもたれた　ものすごい人は
鉄砲片手に　しかと抱いて……

有名なオペレッタ「ディアボロ」の替え歌である。

芋を買出しにきて、田舎のおねえちゃんを色気でだまして、安く売ってもらおうと、大二枚目ぶりの前田は熱演していた。

所は千葉県の木更津付近。

ボクたちは、神奈川県下のみでなく、あらゆる知合いを通じて、県外の巡演も始めた。そして、昼は小学校、夜は劇場と巡演する。劇場といっても名ばかりの汚ない芝居小屋や、あるいは映画館で、コントとか、人形芝居とかを公演してまわった。

現在の「木馬座」にはとてもかなわないが、幼稚な影絵芝居の「白雪姫」などを上演した。スポット・ライト二個ぐらいで、いろいろと工夫をこらし、クローズアップ、ズームイン、オーバーラップなどの映画の技術らしきものを取入れて上演した。

ある時は演出に、ある時は声優に、ハーモニカを吹い

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c